

# 国際会議：科学する心

## 「生命科学と人間」を終えて

江橋 節郎

「生命科学の発展は強力な生物兵器を生み出す。それは人類の滅亡に繋がる。」「優秀なクローン人間の創造。」このようなセンセーショナルでSF的な見出しの記事が、マスメディアを通して、巷にあふれでている。新しい科学の登場が、それに対する期待と同時に、恐れや不安を生み出すということはいつの時代にも起こることである。倫理は歴史を背負い、科学は歴史を拒否して進むのが常である以上、既成の倫理感と新しい科学との間に何らかの軋轢が生ずるのは当然の結果とも言える。

しかしながら、とくに現在の日本においては、生命科学の有用性と危険性の議論ばかりが先行して、その産業的利用とか「神に対する冒瀆」とかいう社会との接触面だけが極端に前面に出て、人類共通の財産としての科学的知見と、それに基づく人間の英知を地道にふやしていこうとする誠実な科学者にとって好ましくない状況にあると言える。

このような意味で、「生命科学と人間」と題する国際会議が日本で開かれるということについて、正直なところ少しばかり危惧を抱いたのである。西洋と比べて日本における科学の伝統は浅い。つまり科学を、純粹に科学的事実に基づいて議論を進めようという科学者の態度を、当然のこととする社会的な基盤がまだ十分に固

められていない。その結果、科学的根拠の薄弱な、誇張化されたSF的なマスメディアの雰囲気意識し過ぎて、科学者としての地に足のついた議論が制約されるのではないかと危ぶんだのである。結果的には、それは杞憂に終わった。これは倫理学者・宗教学者・心理学者等も含めた海外の参加者がこの種の議論の経験を十分積んでいて、お互いの基本的立場の違いを認めた上で、参加者全員が確実に理解できるような内容の議論が展開されたからである。

この会議の参加者に選ばれた際、私にはもうひとつの懸念があった。それは、この会議が政府のイニシアチブで始められたという事実が直接間接尾を引いて、われわれの発言が意識的、無意識的に制約されるのではないか、そしてこれがひとつの例となって、ひいては日本の科学研究にあるコントロールがかかるのではないかということであった。しかし、この点については政府の方でもこの懸念に対しては非常に気をつかい、慎重に対処されたため、これまた杞憂に終わったのである。そして本会議の結論ともいえるプレスステートメントでも強調されたように、この会議に出席する学者や文化人は、政府ないし国の意見を代弁するものではなく、会議場においては参加者はあくまで個人の資格であり、個人としての自由な発言を行うものであ

ることが確認されたことである。それぞれの専門家がその経験と思索に基づいて、お互いに個人として意見を交わすところから生まれてくるアイデアを尊重してこそ、こういった会議の意義があると私は信じている。このことは今後のこのような会議のひとつの良い先例になるであろう。

さて、以上のように、私の抱いていた二つの懸念は両方とも杞憂に終わり、また、問題を規定したり、結論を出したりするのを極力避けて、広く異質の意見を開陳して、問題点のありかを明らかにするという基本方針も、ほぼ満足させられたとあってよい。全般的にみて成功だったと言えると思う。このような、迂遠ともいえるような基本方針を守ることができたのは、今回の開催をフランスが引き受けたことに負っており、われわれとしても感謝しているところである。

今回の会議は、われわれ日本人にいろいろな教訓をもたらしたが、私自身にも、科学とは何かということを改めて考える機会が与えられたのである。生命科学の研究も他の科学の研究と同様に、時に爆発的な前進があるように見えても、長期的には、ひとつひとつの事実や発見の積み重ねの上で進歩するものである。抽象的で感情的な議論からは何もかも生まれえないとあってよい。倫理的規制を強調しすぎることは、ともすれば科学研究に対する意欲自体を悪とみなすムードを作り出しかねない。科学者がその興味を追求するという人間として根本的な欲求まで社会的に規制することは、人間の生きようとする意志の衰弱にまで関わってくる重大問題である。社会は科学する意欲というものを、人間性の自然な発露として肯定し、その研究成果の応用の段階で、その社会的影響の是非を個別にチェックすべきものであろう。科学は人間の貴

重な財産であり、科学的事実を無視しては、文化や哲学もあり得ない。さらに一步を進めていこうならば、科学的事実のもたらす最大の成果は、それによって起こる人間の思想や世界観の変革である。

科学の健全な発展にとって留意しなくてはならない点のひとつに、長期間にわたって一つの分野だけが突出するという状態は良くないということである。生命科学の中で、遺伝子組み替え技術ないしはそれに関連した問題だけがとくに現在スポットライトを浴びているが、それだけが独り歩きして進むことは不可能であるし、もしあえてそれを試みるならば、自らその首をしめることとなる。例えば神経生物学 (Neurobiology) ないしブレンサイエンスは疑いもなく現在そして将来の生物学の最大の課題であり、他方われわれの体の仕組みを考えても解るように、一見目立たぬ組織や機能もそれなくしてはわれわれの生命は存在しないことは明らかである。分子遺伝学も、こういった諸科学と手をたずさえて、ともに発展していくことが望ましいのはいうまでもないことである。また他の領域の科学者も今分子遺伝学者が当面している問題を自分の問題として意識する必要がある。

科学には二つの側面があり、ひとつは、純粋に科学的追求によって人間を含めたすべての存在を理解しようとする面で、これは神の御業を窺うという16~18世紀の西欧の科学者の態度に見られる。もうひとつは、欧州の科学を受けたアメリカでとくに発達したものであって、サイエンスをテクノロジー的に評価しこれと結合させるという面である。科学評論家の中には前者を科学の初期段、後者を科学の発展した段階と解する人もあるが、私はこれには賛成できない。中国では2000年それ以上の昔から西欧で15世紀以後に現われた技術——例えば印刷技術な

ど——が発達していたが、それを解析し一般化するマインド、つまり科学は発展しなかった。それにはいろいろな理由が考えられようが、中国人が聡明であり過ぎるために、その実用性を容易に見通すことができる結果として、功利的、政治的になったためではないかと考えられる。私は科学の二つの側面は、いずれにも偏ることなく推進されてゆくべきものと考えている。

〔注〕上記は、昭和59年3月19～22日にわたって東京および箱根において開催された「生命科学と人間」の会議後、乞われてその印象を、英文紙「Look Japan」に翻訳掲載されることを前提として口述したものである。そのため邦文としてはいささか奇妙なところも多いが、全体としてはその時の私の気持を正直に伝えているという点で、あえて手を入れないことにした。

あれから1年近く、この間に日本の雰囲気は大きく変化したと思われる。当時、われわれが恐れたような社会情勢が、いつの間にか大きく変化して、その当時のわれわれの心理が、現在では思い出せないような面もある。確かに日本人は極めて変動的で、極端から極端へと簡単に揺れ動いていく。例えば、心臓移植の問題にしても、某氏の渡米手術後は、その技術の開発を怠ったという従来とは180度違った方向からの学界への批判さえあった。

しかし、それよりも重要なことは、そのように大きく揺れ動くように見えながら、日本人は決して変わっていないのである。このことと関連して少し触れたいのは、マスコミ的にむしろ日本人の独創性云々の問題が喧しくなったことである。日本人のすることはすべて猿真似だという議論は、流石になくなったが、日本人によい「思い付き」はあっても、本当の意味の独創性はないのだという議論にはかなり多くの人が賛同し、ではどうしならこれを独創的なものにするかということが話題となってきたよ

うである。

大部分の日本人に共通の欠点（あるいは長所かも知れない）といえるのは、科学というものを単に小手先の問題として、それからどのような利益が上がるかということだけに関心をもっていることである。コペルニクス、ガリレイ、ダーヴィンといった人びとで代表されるような科学と、宗教ないし体制との凄惨な闘争が、人類共通の問題として理解されていないのである。かつて、天然痘ワクチンの副作用のトラブルが日本であった時、ある母親が、「私の可愛い息子にそんな危いものをやられたのでは困る。どこか（動物実験では調べのつかないことは、この母親に分かっていたはずである）で充分に実験をやってきてからにしてくれ。」と発言したのに対し、そこにいた学識経験者がまことにごもつともと相槌をうったことを私は鮮明に記憶している。日本人にとって、科学がもしそのようなものであったならば、独創性などという論議をする必要は全くないのである。どこかでやって貰ってから日本へもちこめばよい。

この会議が受けた最も強烈な印象は、英国の代表者の1人、S. プレンナー（分子生物学研究所長）をはじめとする西欧の学者の自然科学に対する真摯な情熱と愛情であり、それを守るために敵と闘う雄々しい勇氣である。この会は外交的には成功であったといわれる。しかし、私自身は、科学者を称する人間として深い敗北感を味わった。日本人は未だしの感を深くしたのである。

なお、第2回の会議は上述のとおりフランスで85年の4月18日から22日に開かれることとなった。会議の体裁・その他は第1回とほとんど変わらないが、テーマは日本の時よりも遙かに具体的なものになるようである。

（岡崎国立共同研究機構教授）